

佛典より觀たる龍と龍王及び龍宮說

——龍思想の準備的研究——

白崎嚴成

序言

佛敎々學の研究の原野は甚だ森然として荒蕪である。之れを開拓するは容易の業にあらず。まして龍と龍宮說なきに云ふ原本的問題に立ち至りては、その研究の範圍が廣く且つ深くして、其等の龍思想と佛敎々學の史的發達の關係を證する事は、淺識寡聞の自分には全く手をつける術べだに知り得ない。唯だ一分の材を佛典二三に採り來つて、龍思想の準備的研究を試みるに過ぎない。而し世般の藝術家又は藝術史家が漫然として、龍乃至龍王、龍宮と稱ぶ原始佛敎の遺物思想を佛敎美術に名を借りて一種の骨董品となして、鑑賞的態度を以ちて望むものとは聊かその出發を同じうして居ない事を豫め斷らなければならぬ。

佛典に顯れたる龍と龍王

佛典に顯はるるところの所謂龍とは智度論の「那伽」にして、その龍は「長身無足」と善見論十七には説く。而して此

「那伽」は亦た象と釋する場合あり。智度論三には此の點を「那伽。或名龍。或名象。是五千阿羅漢。諸阿羅漢中最大力以是故言如龍如象。水行中龍力大。陸行中象力大。」と記るす又舊華嚴經七には「威儀巧妙最無比。是名龍象自在力。」

中阿含經二十九、龍象經にも「唯佛大龍象」等の文句を見之らは賢聖の威力自在を龍に譬へ象に比べしものにて、更に華嚴經には龍自身の威力自在に關して、龍王の雨を降すは身より出し、若くは心より出すにもあらず、積集にもあらず。ただそは龍王の心念力を以ての故に霑然洪濫天下に周徧するを説く。

今前述の龍を翻譯名義集二に隨へば、龍種四分の中その第一の「雲を興し雨を致す」の類にして、第一に屈するのは「天の宮殿を守り持して落ちざらしむ」の類、第三は「江を決し瀆を開く」の地龍の類、第四は「伏藏して轉輪王大福人の藏を守る」の類である。そして此等の龍族の出世に付きても同様に四種の別が、長阿含經十九及び長阿含世記經龍鳥品第五

等に明かす。

此等の佛典に據れる所を綜合すれば、「大海の北岸に究羅跋摩羅呼ぶ大樹あり、諸々の龍王と金翅鳥、この樹に棲む。高さ百由旬、幹の周圍七由旬、枝葉大いに繁茂し實に五十由旬の四方に擴がる。而して、究羅跋摩羅樹の東方より生れたる龍は卵生、南方のものは胎生、西方のものは濕生、北方のものは化生の龍にして、東方の卵生龍の宮殿は、その廣さ六千由旬、七重の牆と、七重の欄干が匝らされ、其の上には七重の羅網覆連し、其の一々の門には七重の欄干を有し、尙、其の牆壁の上には麗美の樓閣あり。周圍には遠望臺設けらる池はこの金殿玉樓の周圍を繞つて清流滾々と湧出し、多くの麗華麗葉はその艶麗の姿態を水に現る。果實は枝に垂下し、麗華果實より吐き出づる靈妙なる所の芳香は風に送られ、遍く四邊に薫じわたりて鳧鴈、鴛鴦、睡じく池に遊び、その他幾千の美麗の鳥類は楽しく舞ひ、或は梢間に戯れつゝ聲を和して啼き囀づる」。云々

扱て吾人は龍と云へば龍宮、龍宮と聞けば水を聯想するに敢て憚らないであらう。即ち佛典中には龍と水に關しての説話も亦決して少くはない。

天竺別集上には「天龍一鱗蟲耳。得一滄之水散六虛以爲洪流」とあり輔行四にも、「龍得水以降大雨」と説き、全くその不測の力用に付きては法華經序品の中にも「四衆龍神瞻

「蔡仁者」と語り、前二文と共に智度論七に於ける「譬如龍泉龍力故水不竭」を想起すれば如何に龍と水とは不離の關係に在るかを知り得ると共に、茲に自分の感ぜし事は彼の大日經一の「是等依龍方」の龍方が即ち北方を指すこと云ふ事であるこれは五行によれば北方は水である。故に正しく龍と水の關係に付て何等かの暗示を與へて居る様に思はる。又破僧事五には「尼連禪河龍伽陵伽此云黑色」とありて、河中に龍ありて住すれば尼連禪河を又の名龍河とも呼べるものにして大智度論二十七にも龍卷の事を述べて「大龍の尾は大海に在りてその頭は虚空にあり。震電雷霆してよく大雨を降す」と記し矢張り水と龍に就ての深き關係を暗示する。最後に彼の古事記によれば、龍はみづちと訓じられ、みづちとは水神、又岡象とも認められ専ら水と縁深いものである事を如實に示し、而かも吾國に於ける此れら兩者の不離的觀念がその起源をかくる原本的經律に依憑せりとの推論は強ち至難とは言はれぬのである。

次に人も知る謠曲「葛城」の一節には

「そも神ならで三熱のくるしみさいふことあるべき」

とあり。この三熱は本來龍種の熱惱にして、長阿含經十八に從へば

「佛言。何故名爲阿耨達。其義云何。此闍浮提所有龍王盡有三患。一者諸龍皆被熱風熱沙著身燒其皮肉。及燒骨髓。以

爲苦惱。唯阿耨達龍無有此患。二者舉閻浮所有龍宮。惡風暴起吹其宮内失寶飾衣。龍身自現以爲苦惱。唯阿耨達龍王無如是患。三者舉閻浮提所有龍王各在宮中娛樂時。金翅大鳥入宮搏撮。或始生方便欲取龍食。諸龍怖懼常懷熱惱。唯阿耨達龍無如是患。若金翅鳥生念欲往即便命終。故名阿耨達以上の引文に明さる如く、阿耨達池の龍王を除きては龍に三種の災患あり、同様の所説は大樓炭經一にも散在するも、善見律毘婆娑十七には、龍は禪定道果を得ざる故に五事ありて龍事を離る事能はずとてその度する得ざるを説く。

次に金翅鳥の難に就きては我國今昔物語にも「龍子免金翅鳥難第九」の條ある如く有名なる傳説の一つにて海龍王經四には「龍得袈娑一縷免金翅鳥難」さあるが之れは、「四大龍王佛に白して、實は四種の金翅鳥ありて、常に海中の諸龍を食す。故に今佛の擁護を得て其安穩を希ふ。故に佛は身の衣を脱ぎて海龍王に告ぐ。

「汝之の如來衣を受けて諸龍に分與し衆に週遍せよ、大海中に在りて一縷に値ふ者は金翅鳥も雖も觸犯する事能はず」と仰せられしが法華文句記にも「龍得一縷牛角一觸」とあり。前述の海龍王經を更に詳にせりと思はるものは長阿含世記經である。少しく引證するに

「卵より孵りし金翅鳥が同じく卵生の龍を捕ふるには、究羅睺羅樹の東枝より大海に飛び込み、兩翅を以つて二百由旬の

海水を掻き分けて龍を捕へ、海上に舞ひ上りて食す。而し此の金翅鳥は他の三種の龍を噉ふ事能はず。他の金翅鳥に於ても大體四百由旬、又は八百由旬の海水を掻き分け、同様に諸龍をそれく噉ふ。されど十六龍王のみはこの難を免る。

娑羯龍王、難陀龍王、跋難陀龍王、伊那婆羅龍王、提頭賴吒龍王、善見龍王、阿盧龍王、伽拘羅龍王、伽毘羅龍王、阿波羅龍王、伽免龍王、瞿伽免龍王、阿耨達多龍王、善住龍王、優睺伽波頭龍王、得叉伽龍王、

且又これらの諸龍の宮殿近くに棲息せる諸龍も其の餘澤に依て、金翅鳥の餌食より無難に終るさる。十六龍王の中娑羯龍王の女、八歳にして靈鷲山に詣で、成佛の相を現す云ふ事法華經提婆品にあり。

扱て謂ふ所の龍王に關しては大集經須彌藏品に五類を擧げて「善住龍王爲一切衆龍王。婆難陀龍王爲一切蛇龍王。阿耨達龍王爲一切馬龍王。婆樓龍王爲一切魚龍王。摩那蘇婆龍王爲一切蝦臺龍王也」とし、

蓮華龍王、翳羅棄龍王、大力龍王、大吼龍王、小波龍王、持驛龍王、金面龍王を以て七龍王となすは最勝經一である。

此の外法華經序品には八龍王、名義大集には八十一龍王、大雲請雨經には一百八十五龍王を明す。而して此等の諸龍王よく縞索を念誦し、成就せしものを龍王仙と名づけ諸龍中においてよく自在を得たるものであることは聖迦提金剛童子軌上の

所説である。

最後に、源氏物語の「龍の中より佛うまれ給はゞこそ侍らめ」もか謠曲「通盛」の「龍女變成さきくさきは姥もたのものしや」等は先の娑竭龍王の龍女説話をその源となし居り、所謂龍女變成さきは、五障を先與されし女身も智慧利根にして機熟すれば不退轉を得て遂に成佛の果を結ぶ。然も女身を一度び男身に改めて後よくその正覺を成するが故に龍女變成さ云ふのである。此の外龍に關する佛典説話は六度集經五、六及雜寶藏經三等に於て最も詳らかである。

龍宮と龍王に就ての考察

吾々が幼な時の寢物語として最初に聽かされたものは浦島太郎であり龍宮である。この龍宮神話は樂土瀧留説話の形式に入り、恐らくは古事記にみゆる彦火火出見尊の海宮神話の變形にして、英雄神話中の勇者求婚神話に屬し、又末子成功神話としても數へ得る。而して此等の神話の根源が遠く佛典に存す云ふ見解に對する考察は稿を改めて論じ早速佛典を繙き度いと思ふ。

先づ海龍經請佛品には

「海龍王、靈鷲山に詣て佛法を聽き、信心歡喜して、佛を大海の龍宮に請じ供養し奉らんこし、佛の許しを得て龍王大海に入り、大殿を化作して無量の珠寶を種々に莊嚴し、その

上海邊より海底に通じて三道の寶階を造る。恰も佛その昔刹利天より閻浮提に降ります時の如し。佛即ち諸の比丘菩薩と共に寶階を涉りて龍宮に入り、諸龍の供養を受けて爲に大法を説かる」。

これに依りて思惟すれば龍宮とは、龍王の宮殿にして、大海の底に在り、且龍王の神力に化作せらるものである。長阿含經十九にも、「大海水の底に娑竭龍王の宮殿あり、縱橫八萬由旬、又須彌山と法陀羅山との間には難陀、跋難陀龍王の宮殿あり、共に六千由旬にして七寶を以て嚴飾し衆鳥和鳴す」と載せらる。同じく十八にも「阿耨達池にも亦龍王の宮殿あり」と。正法念處經十八には「大海中深さ萬由旬にして戲樂と稱ぶ城あり。縱橫三千由旬、その中に法行、非法行の二龍王住す」とあつて此等の龍宮の經藏を龍藏と呼ぶ。即ち禪宗龜鑑には「庭前柏子話、龍藏所未有底」とあり、寄歸傳一には「悲損輕枝現生龍戶」とある。龍戶とは龍宮の別名である又他の傳説に於ては現世に在つて佛法隱没するの時龍王經卷を護持するの宮殿なりと言はる。菩薩胎經七には「龍子の宮殿には七寶の塔がありて經典を收む」とあり、摩訶摩耶經卷下には「千五百歳の後、俱睽彌國の二比丘爭ふ事佛法に累し經典は鳩尸那竭國に集り、龍王之を持して海中に入る」とある。今本文を引用するに、

千五百歳。乃至惡魔波旬及外道衆踊躍歡喜。競破塔寺殺害比

丘。一切經藏皆悉流移至鳩尸那竭國。阿耨達龍王悉持入海。於是佛法而滅盡也。

又蓮華面經下にも

佛言阿難。此閻浮提及餘十方所有佛鉢及佛舍利。皆在婆伽

羅龍王宮中

ごあり。けだし釋尊滅後の佛徒は佛舍利、佛鉢等を以つて直接に其の仰信崇拜の對象とし至尊至重の念を抱きて遺寶を禮拜し供養せしもので、此の事實をよく裏書せるものは海龍王經の第四舍利品であらう。

爾時。海龍王子及一切龍。白佛言。未曾有。世尊。如來所說普安一切。授諸龍決。開化眷屬。皆發道意。乃至今如來受龍王請。所演廣覆。譬如虛空無所不蓋。于今世尊還闍浮利。海中諸龍。無所依仰。唯加大哀。佛滅度時。在此大海留舍舍利。一切衆類。皆得供養華香。伎樂。被服。幢幡。轉加功德。速脫龍身。疾得無上正眞之道。

次に亦佛所行讚第五の説に依れば、阿育王が王舍城の頭樓那塔を初め八ヶ國の舍利を集め、以つて之れを八萬四千の佛塔に配せんご企てるごき、獨り羅摩國の一塔はその龍王の固守するに依りて之を得る事能はざりし事を明してゐる。

扱て茲に聊か佛典散在の諸龍王の中、最も代表的なる說話を抄録しその一半を照會すれば、先づ過去現在因果經には佛聖誕の時、難陀婆難陀の二龍王涌出して空中に住し、太子の

身を浴し奉れりて、

「於是夫人即昇寶輿。與諸官屬并及姝女前後導從。往監尼園。爾時。復有天龍八部。亦皆隨從。充滿虛空。乃至難陀龍王。優波難陀龍王。於虛空中吐清清水。一温一涼。灌太子身」。

ご云ふ。太子瑞應本起經には佛得道の初めに於ては、文隣菩薩龍王は諸畜生の中に在つて第一に佛に見え奉る事を得たりご説き、佛本行集經には、釋尊の將に菩提樹下に向ひ給ふ時此の地六種に震動す。即ち迦梨龍王、驚悟して速に其の龍宮を出で、菩薩に見ゆご録してゐる。而して更に曰く。

「爾時。黑色龍王。有一龍妃。名曰金光。而彼龍妃。復與無量諸龍女等。左右圍遶。其手各執諸如香花」

又北印度烏仗那國附近にて釋尊の阿波邏羅龍王に教化せらるごの説は増一阿含經には「復至烏仗國復值惡龍王。見密述力士而龍自歸命」佛所行讚には「至健駄羅國化阿婆羅龍」ごある。

最後に頗る有名なる佛傳說話の一つは優樓頻螺聚落の優樓頻螺迦葉兄弟教化の際に於て釋尊は毒龍の住する火神堂の中に宿り、謂ゆる十八神變を現じて毒龍を降伏し給へる事にし、之れに關しては中本起經に明細である。

以上を以つて龍王說話の大略を終りしばらく龍樹傳を主とし龍宮を考察する。

即ち龍樹傳、付法藏傳五、賢首華嚴傳一等を綜合すれば、

龍樹は出家の後靈山に入れる事あり。山中の塔に一老比丘住して、龍樹に授くるに大乘妙典を以てせり。依て龍樹は深くこの妙典を誦持愛樂し、實義に通じたるも未だ通利を得ず。

故に自ら念願して、佛經甚だ妙なれど猶盡ざる所あり、依て自分は未盡を究めて之を演べ、後學を悟すであらう。此處に於てか龍樹は更に衣服を造つて持戒を立て、佛法に附屬して小異あらしめんとの大誓願を起し、獨り靜處の水精房中に在りて此の事を思惟し憶念す。

時に大龍菩薩これを見て憐み即ち引接して海に入る。宮殿の中に於て七寶の華函を發して諸の方等深奥の經典無量の妙法を以て彼に授く。依りて龍樹之を受讀する事九十日、全く通解得る處甚だ多し。龍問て曰く。看經遍しや。答へて曰く。汝が諸函中の經典無量なり、我が讀む所己に閻浮提に十倍す依て再び龍樹を南天竺に送り、龍樹亦大いに法を弘通して外道を摧伏せり。

今賢首華嚴傳一を引例すれば、

「如異諦三藏云。西域傳記説。龍樹菩薩經龍宮見此華嚴大不思議解脫經。有三本。乃至、下本見流閣浮。」

而も龍宮に引接されたるは強ち龍樹のみではなく、法華經提婆達多品には文殊大海の娑竭宮に入りて八歳の龍女を化すこあり。智度論十二、止觀輔行一等にも能施太子に付ての傳

説あり。

「釋迦牟尼佛因位の時に大醫龍となり、一切の病を療す。病者甚だ多く力足らずして懊惱して死し忉利天に生ず。自ら思惟す、我れ今天に生れて福報を享くるも人に益なしと、自ら方便を以て天壽を捨て、娑伽陀龍王の宮中に生れて龍の太子となり、身己に長じて又方便して死し、閻浮提の中に生れて大國の太子となり、能施と名づく。生れ乍らにして施を好み、年長大にして自身の所有皆盡く乃ち父母に告げて曰く。龍王の頭上に如意寶珠あり、一切の財物を雨らす。我れ之を得て一切の貧窮を賑はさん。父母之を許す。太子即ち大海に入りて龍王の所に亘る。龍王神通力ありて其子なるを知り、太子亦宿命を知りて其の父母を識る。龍王大いに喜んで其欲する所を與へん。太子龍王に請ひて其の頭上の如意珠を得、閻浮提に還り來りて、意の如く一切の財物を出して人の所須に隨ふ。」

こありて、文中の「如意珠」に關しては、四分戒本破二上には「律中龍珠鳥翅。一去不還」行宗記二上には「龍珠者。昔有螺髻梵志。居恒水邊。爲龍所撓。佛令從彼乞頸下珠瓔。龍即不來。」とて龍その珠を惜みで遠く去るを記す。

要するに女狎の「龍宮祕旨驚嶺微詞」と云ひ、義淨の「龍宮祕典海中探」と云ふも、龍宮が専ら勝妙の經典を藏すこと一般思想は、元來龍王は寶珠を前記の如く愛するより一轉

して佛舍利を藏すこせられ、再轉に及んで法舍利たる經典をも收藏するこせられたるものであらう。華嚴玄談會文記二に「或は云ふ。龍宮藏は喩に従ひ名を彰す。龍宮は珠玉多し。法藏には無邊義を具するなり。」にて此の推測を裏書して居る。

最後に龍宮の莊嚴に付きては既に略述したるも、今そを難陀龍王の宮殿に求めば、

宮殿の廣さ六千由旬、七重の牆、七重の欄干、七重の羅網七重の行樹あり。何れも七寶にて作られ例へば金の欄干には銀の桃、銀の欄干には金の桃がつけらる。その上には尙珍妙なる寶網掩連し、瑠璃羅網の下には水晶の鈴、水晶羅網の下には、瑠璃の鈴垂下し、七寶の種々の樹生ひ繁りて赤珠の樹には赤珠を枝とし、瑪瑙の葉は花を果をつけ、瑪瑙の樹には瑠璃を枝とし、赤珠の葉は花を果をつく。下略を叙述してある。更に婆竭龍王のそれを觀察すれば、その廣さは八萬由旬、金銀瑠璃頗梨磔磔赤珠瑪瑙の七寶に依て七重の牆壁を欄干を羅網を行樹あり。金の牆壁には銀の門、水晶の牆壁には瑠璃の門あり。云々を記されてある。

如意寶珠と支那に傳ふる龍宮説

闇を厭ひ明を好めるは人心の常にして、闇黒に對する嫌疑

又は恐怖によりて、種々の迷信、傳説を生じまたその筋を助長せしめし様に、光明に付ても愉快の情、恩惠の感謝等より雜多の神話、信仰を産み出す云ふ事は至る所の上古に、殆んど共通せる太陽神話の存在して居りしに徴してもこの思想に由來して居る事が判明し、それがやがて光明その者を崇拜し又は嗜好する心を移して光明を具有する物體その者を嗜好し、崇拜するに至れるのは自然の現象である。且や後世に至るに従つて大空の光明といふ漠然としたる自然現象よりも明鏡明玉と云へる如き、具體的に觀照し易き客觀物を却つて嗜む様になれるのは、けだし免れ難い勢ではなからうか。即ち吾々は今所謂明玉寶珠につきての信仰と趣味を叙べ次いで龍珠に及びたい。

印度に於いて莊嚴修飾の具として普通に數へる七寶といふものは皆その光明と、色彩の貴重すべき意に出たものであるが、それらの珠石の中最も理想的なものは如意寶珠であらう彼の如意輪觀世音の像がその掌中に保持して居らる所のものは、この如意珠にして、特にこの寶珠を以つて表はされる所の屬性を本誓せらるゝ事を表彰して如意輪觀世音と稱するのではなからうか。而て此の如意寶珠を一佛又は菩薩の附屬持物としての位を更に進めて、寶珠其物を直ちに本尊として尊奉するに至りしものは眞言密宗の特色である。悉しくは如意寶珠金輪呪手經を始め、該宗經釋に決類の至る所に散見さ

れ、寶珠を本尊とするが如きは蓋し積極的教義を事相の上に表す此の宗意の自然的結果云ふ可きであらう。

各の如く、密教にては佛舍利信仰と結合して兩部不二の本尊と迄に崇敬されたる如意寶珠も實は前述の如く只その光明に對する吾々の觀念の想化に基きしものに過ぎないのであるが、さて然らば論ずる所の如意寶珠は一體何處から來たりたるものであらうか。

大海は常恒に濤うちて巖石貝鱗を揉み碎いて居る。而て海を知る人民が、魚貝珊瑚の如き動物的化石の麗朗然たる美玉を海下に産せしむるに對て、その嗜好を起すのは怪とするに足らない。

又海潮には干満がある。涅槃經には大海の八不思議を數へてその時を失はない事をあやしんでゐる。

以上の二つの異りし思想は前に龍宮といふ海上の暴風雨、又は龍卷の現象より生ぜし一種の畜類社會の信と結びつきて、華嚴經、法華經なきに見ゆる龍王の宮殿中より水が湧出し、大海の潮に時限の定まりて居る事、宮殿中に四寶珠があつてよく海内一切の珍寶を生ずる事の傳説を作れるのである。此の寶珠が果して眞多摩尼とは未だ斷つてはないが、能生海内一切珍寶といふ所を以つて觀れば、直ちに一步を轉ずるに如意寶珠として尊奉せらる可き、その前身たる事を示すに見ても難はないと思はれる。

法華經にも

「爾時龍女有一寶珠價直三千大千世界、持以上佛、佛即受之」
と見えて居るが未だこれのみにては然りと定める事が出來ないが矢張り如意を彷彿せしめる。

以上を全て約言すれば寶珠の理想化には三種の段階がある。一は目視の珠玉を珍寶するもの、之は普通の光明色彩の美を嗜む心を以て尙ぶのである。二は龍王の世界に産するもの、即ち尋常ならざる神祕的の性質をも有するものとして尙ぶのである。第三は更に之を理想化して殆んど抽象的の性質に迄推し上げ、宇宙の眞理本體に冥加するものである。此の中第二の龍珠に付きては獨り印度のみならず、支那、日本にも多くの傳説を残してゐる。而て印度に龍宮龍珠の説が存して、居りしは毫もその獨創であるを狐疑せぬが、支那の此の説に至りては大いに考慮の餘地を有する如く思はるので、しばらく支那に於ける龍思想に付て言及し以て結論に筆を運びたい。

龍思想は支那の此の國あると共に離れ難き因縁のある様に見受けられるが、茲に注意したいのは彼國の龍は主に空中出現の龍であつて、時に雲霧に乗じて其の形を隱現する云ふ傳説は存すも、海底に宮殿を構へて居る云ふ事は古代に見當らぬ。

彼の傳説は、「海若」や「河伯」の事もあるが、それは一種

の神格にして宮殿を有す云ふ事も、珠玉に關係せる説話も何等附隨してはゐない。

恐らく龍宮に付て始めて支那文獻に顯れたるものは蜀の杜光庭の撰による録異記五であらう。

海龍王完在蘇州東入海五六日程小島之前濶百餘里四面海水粘濁此水清無風而浪高數丈舟船不敢取近每大潮水漫沒其上不見此浪船則得過夜中遠望見此水上紅光如日方百餘里上天連船人相傳龍王宮在其下矣。

さある。思ふに之れは船人の相傳よりみて多分海上を跨にする者の、支那内地に見出し得ない海龍王説話を印度より將來したものであらう。且又次章には「柳子華、成都命となりて役所に勤む處へ、壯大なる行列を整へて來れり女あり。何處の貴婦人と思へばそは龍女にて左右に扶けられつ、堂に上り子華と對面して、宿命與君子馬匹偶と喜びて酒樂をなし、後頻りに往復せしが、後日子華は役所を退きて行方不明なる世人は龍宮に入りて水仙となりて傳ふ。此の柳の孫の君慶といへるは大いに慈善家なりしが、其家に程大の一明珠を寶として傳ふるは、其の祖父の殘留遺物である。云々」と云ふ傳説を載せてゐる。是によるに、龍王、童女の事を明し、兼ねて龍珠の事を仄かにしめせるのであつて、私考するにこの説話はその源を智度論十二、止觀輔行一、及び法華經提婆品に有してゐる。

梁の任昉撰、述異記上卷には

南海有龍謂宮泉先織絹之處綉有白之如霜者乃至凡珠有龍珠龍所吐者蛇珠蛇所吐物南海俗諺云蛇珠千枚不及玫瑰言蛇珠賤也越人諺云種千畝木奴不如一龍珠。

これに依れば、最早や其の海邊の俗諺には、早くより龍珠の高貴と云ふ觀念が出来て居たのである。又晋の干寶の撰にかゝる搜神紀には「昔隋侯齊國を巡行する途に、小蛇の三尺ばかりなのが熱沙の中に宛轉して苦しめるを見て憐心を起し援けて水中に入れ、もし神龍の子なれば此の恩に自分を擁護せよと言ひて放す。それより後二ヶ月にして同路を通る時に、忽ち一小兒が、手に一明珠を把りて侯に奉る。侯あやしみて問ひしに、嘗ての小蛇と答ふ。」と載せてあるが、之れには正法念經なきに見ゆる非法行龍の大力神通はあり乍ら、恒に熱沙の苦をうくるに云ふ三熱の説話に思ひ合すべき性質が多分に含る。

次に前説の隋侯の「汝若是神龍之子當願擁於我」と云ふ言、龍が人界を擁護するに云ふ思想は支那本來の思想には到底出来せずして誠に印度思想の直輸入である。更に又前例柳子華の説話に於ても、龍女が宿命によりて夫婦になるに云ふ三世思想は、到底支那固有とは認められないのである。

又述異紀下にある、

素始皇帝至東海海神捧珠獻於帝前今海畔有秦皇受珠台

を云へるのは且て述べたる如く法華經提婆品に容易に其の出典を求め得る事が出来るであらう。

要するに東洋の龍思想は西域印度地方の説話か、遊離して俗間に入り来ると共に一面には佛典に物せられ、それが傳説史の常軌に従ひて發展せり考ふるが至當である。

結 言

想ふに上來略述の龍思想には各々其の内在的意識の上に各自の異なる境地を有してゐる。例へば佛傳中の奇蹟として即ち佛傳圖の一として過去現在因果經等に見出し得るもの、又世界説の一部として所謂龍鳥品の説相に表現されたるもの又は佛滅後に於ける法寶護持者としての龍王を説くもの等、其の類必ずしも一准ではない。而もかゝる點より更に一步を推せば、龍思想それ自體を對象としての崇拜は行はれざりしものゝ斷じ得る。唯だ往々にして佛典に顯れたる龍、龍王、龍宮の文學的表現が崇高美的機能を有する怪奇的なるよりして銜奇者の捏造妄説なりとするが如きは餘りにも獨斷を云はなければならぬ。

参考佛典及び一般文献鈔録

智度論 華嚴經 日藏經
付法藏傳 增一阿含經 長阿含經

超世經	四分律	善見律
正法念經	正宗記	大般若心經
楞嚴瓔珞	十誦律	宗鏡錄
方廣大莊嚴經	佛本行集經	五分律
釋迦譜	大唐西域記	七佛神呪經
大集經	月藏經	大毘婆沙論
因緣僧護經	僧祇律	寶積經
法華經要解	三藏法數	雜阿含經
楞嚴經	經律異相	義楚六帖
維摩經註	毘奈耶雜事	大日一行疏
須彌藏經	摩得勒伽	瑜伽論
立世阿昆曇	觀佛三昧經	彌勒成佛經
心地觀經	維摩經註	俱舍論
南涅槃經	最勝王經	理趣六度經
止觀輔行	中阿含經	解捨論
無性攝論	圓觀略疏三鈔	心經顯正記
華嚴疏	雜集論	遺教經
名義集	法苑珠林	央伽魔羅經
合部金光明經	薩婆多尼	十善戒經
五百問經	大雲請雨經	聖迦提金剛童子軌
摩訶摩耶經	蓮華面經	菩薩胎經
禪宗龜鑑	如意寶林金林呪王經	中本起經

太子瑞應本起經	普曜經	衆許摩訶帝經
初分說經	毘奈耶破僧事	異出菩薩本起經
黑氏梵志經	十二遊經	出曜經
佛本行經	毘奈耶	苾芻尼
法顯傳	福蓋正行所集經	洛陽伽藍記
修行本起經	過去現在因果經	大方等大集經
大寶積經	佛五百弟子自說本起經	新歲經
錄異記	述異記	搜神記
本草綱目	卓氏藻林	持寶通覽
分類故事安語	古事記	古今著聞集
今昔物語	宇津保物語	宇治拾遺物語
一休和尚法語	田舎源氏	雨月物語
御伽草紙	日本紀	大鏡
開目鈔	唐物語	祈禱鈔
祇園女御九重錦	狂言記	源氏物語
竹取物語	俵藤太物語	徒然草
道成寺現在蛇鱗	萬葉集	江戸著聞集
石川雅望集	平賀源内集	花月草紙
勅修法然上人御傳	謠曲集	里見八犬傳
駿臺雜話	形聲說文	繪本太閤記

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。